

伝世品から得た「錦」の織組織について

— 延文二年の墨書のある聖観音菩薩像納入遺品から —

安 蔵 裕 子

古くから服飾を含む調度に美術工芸的価値が見出されてきた「錦」には、「絹の先染めによる上質な紋織物」との概念はあるが、必ずしも明確な定義はない。また錦の呼称には混乱が見られ、「如何なる錦か」という一定の根拠に基づくデータ表記が確立されていないように思われる。資料的価値の解明に重要な織組織の解析データは、一定の法則による記録の集積とその開示が望まれる。

今回、実測の機会を得た染織品は、像内納入品として伝世する織物の残闕である。経糸・緯糸とも断裂が甚だしく原形はとどめないものの、萌黄色と金茶色の糸による織組織の形成が観察可能で、納められていた菩薩像には制作時期に関わる年記があり、織技法の編年を推察する上で好個の資料である。本資料の染織史上の位置を検討するにあたり、主に佐々木信三郎氏、藤井健三氏の研究を基盤とし、①実測による織組織の解明、②織組織の呼称による分類対照表の作成、③比較・照合による類似・関連資料の抽出、④紋織物の記録資料の作成を試みた。結果、西大寺、速玉大社所蔵資料等に酷似し、「準風通平組織緯錦」とするのが穏当であろう。鎌倉時代から、室町時代の織技法によるものと推定され、この種の組織で平組織は僅少であるが、本菩薩像の推定制作時期とほぼ一致する。

なお本像については、すでに、内田啓一氏によって報告された。

○文化史学会次回大会予告

日 時 平成16年11月27日(土)

13時30分～17時

会 場 昭和女子大学研究館

7階視聴覚教室(予定)

大会講演 大沢眞澄

研究発表 渡辺伸夫、藤波朋子

発表希望者はお申し出下さい

○入会案内

どなたでも入会できます。会費(146頁の会則参照)を納入して下さい。

①歴史文化学科教授室(研究館5階)に持参していただく、

②郵便振替をご利用下さい

口座番号 〇〇一二〇一六一二四七四三

加入者名 昭和女子大学文化史学会